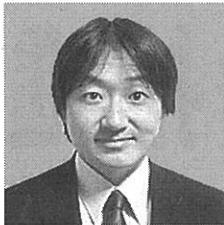


(第3種郵便物認可)



サイ・テク こらむ ● 知と技の発信

(374)

次は、「自分の名」で
大学院研究科 藤森厚裕准教授

■米國から東大、そして埼玉に
膠質化学（こうしつかがく・現
在のコロイド化学）を専門として
いた鮫島は、もちろんそのとき
既に、世界最高峰の化学系学術雑
誌である、アメリカ化学会誌の記
事を目にしていた。彼は、目の前
のノーベル賞受賞者に尋ねた。貴
方の弟子の言つ、『LB法』とは
一体何だ?」。

2000年、米国の一社（現
トムソン・ロイター社）から、各
学問分野における学術論文の被引
用件数最上位の研究者たちが発表さ
れた。ここに名を連ねた日本人の
研究者はわずか百三十数人。一説
には、世界最上層トップ0・5%
ともいわれたこの「ナンキング」中
に、選出の栄誉を受けた日本人の
多くが旧帝国大学系に所属してい
た。34年時点では、「この報告はま
だ「予告報」の段階であり、世界
がその詳細を知るのは、翌35年の
ことになるはずだった。

Kiyoshige Fukuda た中で、埼玉大からたつた1人、
という名前が確認された。
福田 清成教授。東大を退官後
3年間、埼玉大で教へんをとり結
けた鮫島の「直弟子」。彼が、鮫
島と、そしてラングミュアから伝
授されたLSB膜の技術が、いかに
世界の研究者に貢献したかを示
エピソードである。

■ 地方大学の「勝つ方」

28歳の福田が、講師の肩書で差
し任された当初、埼玉大には大学院が
なかつた。福田が52歳になつては
じめて、修士課程が設置された。
博士課程の設置は彼の退官2年前
のことである。福田の業績は、そ
のほとんどがたつた1年間の卒業
研究の後に集りつてしまつ、大學
4年生と共に成し遂げられたもの
だつた。

福田の直系である中原弘雄教
授は、筆者の直接の師である。師
からは鮫島・福田らのエピソー
ドをよく聞かされてきた。名譽

教授となつた福田の自宅に、筆者はたびたび通い、その肩をもみながら、老師の話に何時間も聞き入つた。福田名誉教授、そして中原名譽教授ももつ、この世の人ではないが、彼らの存在なくしては、今の研究者としての自分は、在り得ない。

世界中どこに行つても、「お前は、フクダ・ナカハラの弟子だな。」では、LB膜は本家本元だ」と、認識される。帝大系の出身ではない著者でも、「名門の出」と認識されるのは、ありがたい。研究の知名度は、その規模でも人數でも資金力で決まるものでもない、といつ実例であろう。しかし“L”も“B”も福田も中原も、「私の名前ではない」。先人たちの築いた「地方大の勝ち方」を示し続けるには、次は私自身が自分の名で、(例えば図に示すよつた)新しい概念発信の使命を担つてゐるだけと自己に言い聞かせる毎日である。